

と き め き

島根県農業技術センター

イネいもち病菌のMBI-D剤耐性調査

島根県内のMBI-D剤耐性いもち病菌の出現状況を調査した結果、県内のおよそ3割の圃場で耐性菌を確認しました。今回の結果から、一部地域で使用農薬が変更されています。

イネいもち病の防除薬剤であるMBI-D剤（商品名：ウィン、デラウス、アチーブ）は主に育苗箱施薬剤として使用され、長期間効果が持続することから使用面積が増えてきました。しかし近年、西日本地域で本剤の耐性菌発生が顕在化し、いもち病の多発生要因の一つとなっています。そこで、島根県内のMBI-D剤耐性いもち病菌の出現状況を遺伝子診断によって調査しました。

その結果、平成15年に耐性菌の発生を初めて確認し、平成16年では、葉いもち、穂いもち共に耐性菌の発生が確認された圃場率（以下、耐性菌発生圃場率）が1割程度となり、H17年は3割程度まで高くなっていることを確認しました（表1）。地域別にみると、平成16年は益田管内で発生が多く、平成17年は松江管内でも発生が多くなりました（図2、3）。

MBI-D剤の防除効果の低下が認められた地域では、今回の結果から異なる系統の長期持続型箱施薬剤への変更が行われました。当センターではMBI-D剤耐性調査を継続して実施する予定です。

表1 MBI-D剤耐性菌の発生状況

年次	葉いもち		穂いもち	
	調査圃場数	耐性菌発生圃場率	調査圃場数	耐性菌発生圃場率
H16年	49	12.2%	120	15.0%
H17年	22	36.4%	54	30.9%



図1 イネいもち病

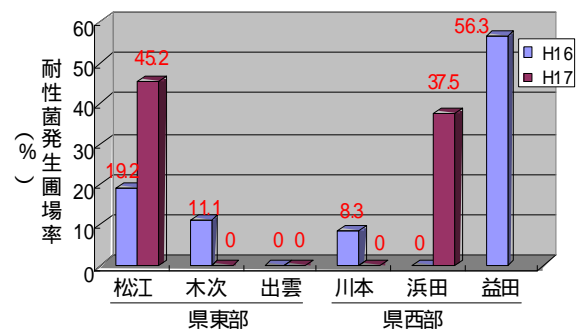
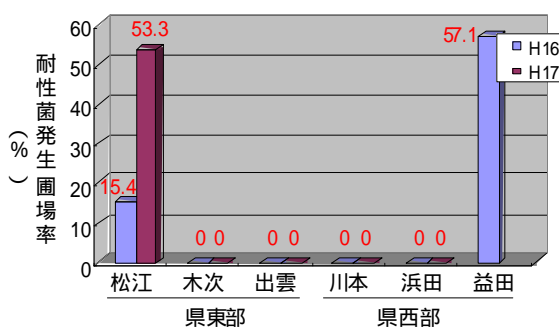


図2 葉いもちにおける耐性菌発生圃場率

図3 穂いもちにおける耐性菌発生圃場率

注) H17年は益田で耐性菌検定を行っていない。

問い合わせ先：資源環境研究部病虫グループ（担当：永島）TEL 0853-22-6698

E_mail: nougi@pref.shimane.lg.jp